

宗教演劇から世界遺産へ

—南インド・ケララのクーリヤットタム

すずき まさたか
鈴木正崇

1. はじめに

二〇〇八年七月二日、インドから一通のメールが届いた。南インド・ケララの宗教演劇クーリヤットタム (Kutiyattam) の演じ手で偉大な師匠、グル・アンマヌール・マードヴァ・チャーキヤール (Guru Ammannur Madhava Chakyar) が七月一日に九一歳で亡くなったという知らせだった。七月から八月はクーリヤットタムの日本公演が予定されており、出演団体のナタナ・カイラーリ (Nataka Kairali) を主宰するヴェーヌ (Venu, G.) からの訃報であった。⁽¹⁾

クーリヤットタムは、ケララのヒンドゥー寺院内の

クータンバラムという専用の舞台で、神への奉納芸として演じられ、サンスクリット語の戯曲に基づく演劇としては世界唯一のものである。門外不出の演劇で、寺院外に知られることはほとんどなかった。グル・アンマヌール・マードヴァ・チャーキヤールはこの伝承を世襲で伝えてきたカースト (ジャーティ) であるチャーキヤールに属し、一九世紀前半頃にイリンジャーラクダに定住して代々伝承してきたアンマヌール一族の長老であった。⁽²⁾ 名優として知られ、古き伝統の保持者として数多くの賞を受賞した。一九八二年にインド政府よりパドマシュリー (Padmasree)、一九九六年にサンギータ・ナータク・アカデミー (インド国立音楽・舞踊アカデミー) から

フェローシップ、二〇〇四年に政府よりパドマブーシャ

ン (Padmabhushan) を受けた。パドマシュリーやパドマブーシャは国家的な業績を上げた人物に贈られる称号で、日本の文化勲章や人間国宝に相当する。一九八八年には来日して、迫力ある舞台に感動した記憶がある。グルはクーリヤットタム演者の養成機関「アンマヌール・チャーチュ・チャーキヤール・スマーラカ・グルクラム」(Ammannur Chachu Chakyar Smaraka Gurukulam) の最高顧問として、長年にわたり師資相承で若手の育成に努め、現在のケララで活躍する演者の多く

が彼の教えを受けている。

クーリヤットタムはユネスコが二〇〇一年に発表した「人類の口承及び無形遺産の傑作宣言」によって、インドでの傑作登録の第一号となった。いわゆる無形の世界文化遺産である。ユネスコは引き続き、二〇〇三年と二〇〇五年に追加を行い、総計九〇件が登録され、日本でも能、人形浄瑠璃文楽、歌舞伎が選ばれている。こうした動きを通して、無形文化遺産保存に対する国際的機運が高まった。この動きはユネスコが一九八九年に加盟国に対して「伝統的文化及び民間伝承の保護に関する勧告」を行い、無形遺産 (intangible heritage) の保存事業に乗り出したことに始まるが、二一世紀に入ってその動きは加速したのである。二〇〇三年のユネスコ第三三回総会では「無形文化遺産の保護に関する条約」が採択され、二〇〇六年に正式に発効した。二〇〇八年には各国からの候補の申請が行われて、二〇〇九年九月に政府間委員会で無形文化遺産を決定し、二〇一〇年六月に登録の予定である。日本の場合、候補にあげられているのは、京都祇園祭の山鉾行事、能登のアエノコト、早池峠



クーリヤットタムの上演
(於ナタナ・カイラーリ)

神楽、大日堂舞楽など計一四件である。二〇〇一年以来の「傑作宣言」の対象になったものは二〇〇八年一月に正式に世界無形文化遺産に登録された。

ユネスコによる世界遺産の登録への動きは、一九七二年の総会で採択された「世界遺産条約」に基づいて始まったが、文化遺産・自然遺産・複合遺産から構成され、「形のある不動産」が対象で、建築物や聖地、あるいは自然そのものを主体とし、演劇や芸能、儀礼など無形文化財にあたるものは含まれていない。しかし、近年になって非物質文化の遺産の保存に関する国際的枠組みが次第に整備されてきた。その背景には、従来の世界遺産への登録内容に、北半球、特にヨーロッパへの偏りがあり、内容的にはキリスト教関係の多さが目立ち、世界全体を見渡した場合には、不均衡であることが指摘され、文化の南北問題とさえ言われるようになったことが挙げられる。これに対してユネスコは、世界遺産の認定基準を再検討して「文化的景観」の枠組みを設定するなどの対応を行ったが、物質文化だけでなく、非物質文化を含めることで、世界遺産を無形まで拡張し、全世界での均衡を

承されているサンスクリット語による古典戯曲を上演する唯一の演劇で、ヒンドゥー寺院でも高位の神々(シヴァ、ヴィシュヌなど)を祀る寺院で奉納され、王族や貴族の庇護のもとに特定の家系の人々が奉仕して伝承してきた⁽⁵⁾。サンスクリット語の古典戯曲には、バーサ(三世紀)、カーリダーサ(四〜五世紀)、シュードラカ(四世紀)などを作者とする作品が伝えられているが、現在でも上演されているのはクリーヤッタムだけで、特にバーサの戯曲を演じる。古典演劇の実技書として名高いのは聖仙バラタ作とされる『ナーティヤ・シャーストラ』(三世紀)であるが、その伝統の一部がクリーヤッタムに受け継がれているという。現在はケララ中部の大寺院を中心に、境内のクータンバラムという専用の儀式場で神への奉納儀礼として演じられ、かつては上位カーストの祭司や王族などが僅かに観覧を許されるだけであった。基本的には神を和ませ祈願の成就を願うのであり、演技そのものが儀礼で、宗教演劇と呼ぶことも出来よう。言語はサンスクリット語とその口語形のプラークリット語を使用し、一部でマラーヤラム語が使われる。クリー

とることを試みた。この動きのモデルとして大きな影響力を発揮したのが、日本の無形民俗文化財⁽³⁾(一九七五年以降)の制度と運用であり、「文化外交」を主軸に据える日本の働き掛けが大きかった。しかし、文化財指定によって、内容や形式に変化が生じることも多く、功罪半ばするとも言える。世界遺産への登録は宗教建築や聖地の意味を変質させ、宗教のあり方に大きな影響を与えてきたが、無形文化遺産が加わって更に複雑化することが予想される。その背景にはナショナリズムと結び付く政治的な動きもある。無形文化遺産の登録は、芸能や演劇などの身体技法を資源として活用する動きを加速化し、人間と神霊との関係を変え、儀礼のイベント化、舞台公演への展開、観光化を通じて宗教のあり方を変動させる⁽⁴⁾。本論ではその流れを南インドの宗教演劇クリーヤッタムを事例として検討し、現代世界で急速に進む文化と経済と社会の関係性の変化と宗教の行方を考察する。

2、芸の継承

クリーヤッタムとは何か。南インドのケララに伝ヤッタムは集まるという意味のクリーリと、舞踊を意味するアッタムの合成語で、複数の演者による演技が通例である。一方、一人芝居(ニルワーハナ *nirahana*)も行われ男優の演劇はチャーキヤール・クートゥ、女優の演劇はナンギヤール・クートゥといふ大寺院で連続奉納される。クートゥとは芝居の意味である。

ケララにはブラーマンに準じる地位を与えられているアンバラウアーシイと呼ばれる寺院付のカースト⁽⁶⁾(ジャヤーティ)がおり、クリーヤッタムはそのうちのチャーキヤール・カーストが男優を世襲で担当し、ナンビヤール・カーストが伴奏打楽器である壺太鼓ミラーウを叩く。ナンビヤールの家系に生まれた女性のナンギヤールは女優とターラム(打楽器)打ちの役割を担ってきた。化粧の担当はナンビヤールの男性である。各カーストは寺院へ奉仕する職能を世襲で伝えることで厳格な芸の伝統を維持し、かつてはパトロンであった王族や寺院から土地を与えられるなど経済的保証を受けており、クリーヤッタムへの奉仕以外の職業につくことはなかった。芸の伝承は屋敷内での道場のカラリ(*Kalari*)で維持さ